



# 土木史フォーラム

Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering  
Japan Society of Civil Engineers

No. 22 2002. 12.

## 目次

土木史ニュース	平成14年度土木学会選奨土木遺産	1
フォーラム	河川伝統技術の活用(仮)	甲村 謙友 2
地域のニュース	マグロと鉄肥杉で栄えた町 堀川運河と油津の町並み	岡本 武憲 3
	旧宇津野発電所用水路について	宮本 裕
海外土木史	ルイ・ファン・ガステレン氏の "In Japanese Rapids"	中井 祐 4
学会の動き	「第23回土木史研究発表会」の開催と講演用論文及び討議欄の募集	5
	土木学会平成14年度全国大会報告	為国 孝敏ほか 6
行事案内	デザインワークショップ2003ほか	
文化財ニュース	重要文化財・登録文化財となった土木構造物一覧	7
土木史関係図書	近代化遺産総合調査報告書他	北河 大次郎 8

## 土木史ニュース

### 平成14年度 土木学会選奨土木遺産

一昨年度より土木学会による選奨土木遺産制度がスタートしました。本年度も15件の土木施設が選奨土木遺産として選ばれました。

no	対象構造物	認定書に記載する趣意文	支部	所在地	竣工年
1	旭橋	完成後七十年を越えた現在も市民に愛され、幹線交通を支えている北海道初のプレストリップ・バランスト・タイドアーチ橋	北海道	北海道/ 旭川市	昭和7年
2	石狩川 生振捷水路	北海道初の大規模治水事業として広大な石狩低地帯の氾濫を防ぎ、また湿地帯を耕作地となしえた捷水路	北海道	北海道/ 石狩市	昭和6年
3	達曾部川橋梁、宮守川橋梁 (釜石線) 一達曾部川橋梁 一宮守川橋梁	JR釜石線の鉄筋コンクリート充腹アーチ橋(昭和十八年改築)で、宮沢賢治の童話「銀河鉄道の夜」の原風景を見る貴重な近代土木遺産	東北	岩手県/ 宮守村 宮守村	昭和18年 昭和18年
4	安積疏水関連施設 一疏水路 一沼上発電所余水路 一十六橋水門 一丸守発電所	明治期の疏水事業の一つ安積疏水のシンボル十六橋水門、一部当時の姿を残す疏水路、発電所施設は貴重な近代土木遺産	東北	福島県/ 郡山市・猪苗代町 郡山市 河東町・猪苗代町 郡山市	明治15年 明治32年 大正3年 大正10年
5	万代橋	日本人技術者による初の空気潜函工法を用いて築かれ、充腹アーチ橋として国内最大の支間長を誇り、マグニチュード七・五の新潟地震に耐えた橋梁	関東	新潟県/ 新潟市	昭和4年
6	晩翠橋	周囲の景観と調和のとれた鋼製バランストアーチで県下有数の名橋	関東	栃木県/ 黒磯市・那須町	昭和7年
7	中島武設計のRCローゼ桁群 一大手橋 一姫川橋 一親沢橋 一昭和橋 一栄橋	長野県技師?中島武の創意によって生まれた世界最初の鉄筋コンクリート・ローゼ桁の一群	中部	長野県/ 木曾福島町 小谷村 小谷村 坂城町 佐久町	昭和11年 昭和12年 昭和12年 昭和12年 昭和13年
8	南郷洗堰	淀川改良工事の一環として築造された戦前期最大の三十二連煉瓦・石造角落洗堰	関西	滋賀県/ 大津市	明治37年
9	旧神戸外国人居留地 下水道	国産煉瓦を用いた横浜と並ぶ国内最初期の近代下水道	関西	兵庫県/ 神戸市	明治5年
10	三滝ダム	日本でつくられた最後のバットレスダムとして立体和風格子の貴重な扶壁の姿を今も残すもの	中国	鳥取県/ 智頭町	昭和12年
11	神龍橋(元・紅葉橋)	戦前に架設された道路用の単純トラス橋としては、最長スパンを誇り、今も帝釈峡において活用されているもの	中国	広島県/ 神石町・東城町	昭和5年
12	田丸橋	昭和十八年に架設された木製方柱形式の杉皮葺き屋根付き橋	四国	愛媛県/ 内子町	昭和18年
13	大橋ダム	昭和十五年に完成した、戦前では国内最大級の堤高を誇るコンクリート重力式ダム	四国	高知県/ 本川村	昭和15年
14	明正井路一号幹線一号橋	大正時代に建設された、我が国最大規模の水路用石造アーチ橋	西部	大分県/ 竹田市	大正8年
15	美々津橋	昭和九年に建設された上路スバンドレル・プレストアーチ橋で、道路橋としては九州では唯一残存する橋梁	西部	宮崎県/ 日向市	昭和9年

## 川における伝統技術の活用

甲村 謙友

(国土交通省河川計画課)



我が国は、梅雨、台風、降雪等様々な降雨形態を有することに加え、急峻な山地、複雑な地形、多種多様な地質などにより、多様に富んだ多くの河川を有し、これらの山と川があいまって山紫水明と言われる景観、風土を醸成してきた。また、我々は幾十世代にも渡って沖積低地で洪水を防ぎつつ川の水を利用して生活の場所と糧を得てきており、川と人との相互作用のなかから様々な川にかかわる伝統技術が産れ発展してきた。

伝統技術は、単に水制、蛇籠等の個々の施設の設計・施工といったハード的なものだけでなく、河川の計画や流域での対応、さらには行事や生活習慣等のソフト的なものまでを含んで考えるべきものである。また、伝統技術は当時のままに復元するだけではなく、伝統技術の背景にある古人の智恵を学び、現代の技術や社会経済にあったかたちで活用していくべきものである。

我が国の河川伝統技術の特徴をいくつか挙げれば、まず、水制工・霞堤・河畔林等のように川を力づくで押さえるよりは、川の持つ自然の力を利用して川を治めるという特徴がある。第2次大戦後の荒廃した国土を早急に復興し、土地利用の高度化を図るため、河川を直線化したり護岸をコンクリートで固めざるを得なかったが、最近では、河道の深掘の防止、生物の生息環境の維持等の目的で水制工等が活用されてきているし、信濃川長岡河道計画のように低水路法線に平行に水制工を配置し、融雪出水時の土砂を水衝部に堆積させるようにして高水敷を造成するといったこともなされてきている。

2つ目には、洪水を堤防だけで防ぐのではなく、二線堤、河畔林、輪中、水屋等流域での対応も含めて洪水被害を軽減しようとするものである。これらは、岐阜県の輪中地帯にみられるように、当時の政治的な制度上連続堤を造れなかったため止む得ず用いられてきた面もあるが、近年では、超過洪水への対応

や土地利用状況によっては早期に治水効果をあげるために用いられてきている。例えば、山間狭窄部の河川や京都府の由良川、三重県の相野谷川では、家屋の集中している箇所を地上げあるいは輪中堤で防御し、他の部分は土地利用規制等を行って、早期に洪水被害を防止しようとしている。

3番目には、地域の特性や川の性格に応じるとともに、それが産業・生活とも密接に関連していることが挙げられる。徳島県を流れる吉野川では、藍作の関係もあって、連続堤の築造は積極的には行わず、竹林等を河畔林として氾濫流の低減、土砂流入軽減等を行ってきたが、竹を材料とした和傘・ものさしは昭和前半には各々100万本の生産を成し全国でも屈指であった。これらの産業は、戦災や新材料の出現により衰退し、戦後から始まった竹人形として残っている。吉野川の近代改修では、堤防築造に併せて竹林を伐採していくことが多かったが、最近では堤防への水勢の緩和、環境面等から極力竹林を残すようにしてきている。但し、上述のように竹の生活・産業利用が少なくなったため、竹林の維持管理に課題がないわけではない。ラオスのメコン川では現地の経済的側面もあって河岸防御に現地産のメコン柳を用いた粗朶沈床が我が国の技術協力により移転されて、河岸防御に効果を挙げていると共に、現地での雇用創出や過度の伐採開墾の抑制等に寄与している。

河川伝統技術は決して固定的な技術ではなく、歴史的に川と人との相互作用のなかから産れたものであるから、その智恵を変化する時代、地域に合わせて活用していけるという特質を内在したものである。今後も、川と人との相互関係をさらに深め、活用していきたい。

## 地域のニュース

おび  
マグロと飢肥杉で栄えた町 堀川運河と油津の町並み

日南市の油津は、外之浦（南郷町）と並ぶ天然の良港として、古くから日明貿易や琉球との交易で栄えていた。貞享3年（1686）、飢肥藩5代藩主伊東祐実の命で堀川運河（当時は「堀川」と呼ぶ）が完成し、飢肥藩の船倉が設けられた。

油津が最も栄えたのは、明治後期から大正、昭和初期にかけてのことで、県内最初の漁港指定を受けて港湾整備が進み、ブリやマグロの水揚げが急激に増加した。とりわけ近海のクロマグロは、昭和6年には36,817尾（現在の約25倍）を数え、東洋一のマグロ水揚げを誇った。さらに、江戸時代後期に大規模な植林が行われた飢肥杉が、この時期に盛んに伐採されたため、堀川運河の両岸は弁甲材（飢肥杉の両面を面取りしたもの）が所狭しと積み上げられていた。弁甲材は、曲げに強くて油分が多いため、和船の船材として国内はもとより、台湾や朝鮮半島、中国大陸まで輸出されていた。

このようなマグロや飢肥杉景気により、油津には仕事を求めて多くの人が集まり、大正9年（1920）から昭和15年（1940）にかけて人口が2倍に膨れあがった。大正2年（1913）には飢肥、油津間に県内最初の

日南市教育委員会 岡本 武憲  
軽便鉄道が敷設され、大正10年（1921）には県内最初の上水道も完成した。

このため油津には当時の繁栄を物語る杉村金物本店、油津赤レンガ館、堀川橋などの国の登録文化財をはじめ、堀川運河兩岸の石積み護岸や取水口の石堰堤をはじめ、多くの建造物や史跡が残る。

以前は堀川運河の風物詩であった弁甲筏流しも、時代の流れの中で途絶えたため、現在はイベントとして年に4～5回実施している。



堀川運河

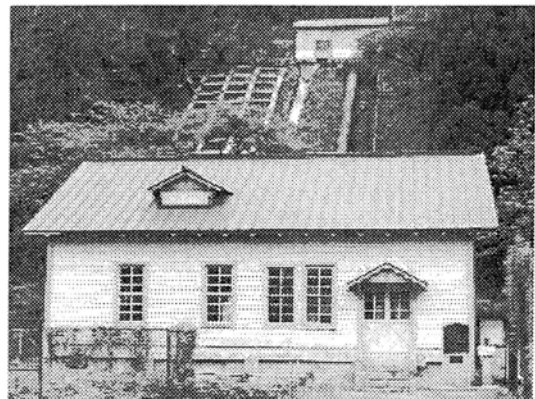
## 旧宇津野発電所用水路について

旧宇津野発電所は、盛岡電気株式会社（後に他の電気会社と一緒に東北電力株式会社となる）により、明治37年（1904）1月に着工された。まさに日露戦争のさなか工事が進められ、翌38年9月から営業を開始した。当時盛岡市内の190戸に初めて電灯をともした。岩手県内現存最古の発電所として、昭和54年8月に市の有形文化財に指定された。発電所は洋風木造建築物で、外壁は下見板張り、機械室のために天井はなく、クインポストラスの木組がすっきり見渡せる。この発電機に使う水は、近くの北上川水系の梁川（やながわ）を堰き止め、3.8kmの距離で宇津野までの水路で運ばれて、落差は35.6mに及ぶ。運ばれた水は裏山の送水管（鉄管内径95cm・厚さ9mm・全長72.38m）で発電機下部に水を届け、噴射式によって水車を回転させ、2,200V、180kwの電力を供給した。また、余水路、建物基礎部の石積み、放水路の石積みなど、現在の様子から竣工当時の状況を読み取ることができる。

市教育委員会職員の案内で、発電所の裏山に登り、そこから水路に沿ってずっと梁川の取水口まで歩くこと約2時間、山間の静かな散歩コースだった。

この水路は建設当時のものが残っているのは一部で、大部分は改修されて現在まで水は流れている。

岩手大学 宮本 裕  
もはや水路の水は発電には使われず、水道用水として使われている。途中に農業用水として急斜面に水を流す所が何カ所かある（鎖のついた仕切り板をはずし、脇の急斜面に水を落とす）。用水はその後改修工事をほどこされ、当初の石積みの水路も残されているが、大部分はコンクリート製開水路になっており、一部は閉水路の所もある。このほど梁川の取水箇所新しい水道施設を作ったため、水路の役割を終えることになったが、明治の水路建造物を一部残しつつ、その後の補修の跡も一緒に保存することに意味を認めるのがよいだろう。



旧宇津野発電所

ルイ・ファン・ガステレン氏の“*In Japanese Rapids*”

～明治のオランダ技術者の足跡を撮る～

ルイ・ファン・ガステレン(Lous van Gasteren)氏に最初に会ったときの印象は忘れがたい。立派な体躯、精力的な顔つき、太く響きわたる声。一見して全身に漲るパワーは、年齢を全く感じさせることがない。現在オランダで最も高名なドキュメンタリー映画作家である氏が、製作に10年以上の歳月を費やした最新作“*In Japanese Rapids*”は、明治時代に日本で多くの業績を残したオランダのお雇い技師たちの足跡を、克明な取材と豊富な史料をもとに描いた労作である。来年の3月に京都で開催される「世界水フォーラム」での日本初公開に先立ち、この映画に注ぐ氏の思いを聞いた。

—明治日本で御雇いとして働いたオランダ技術者に関心を抱いたきっかけは何ですか？

1990年にオランダの水の歴史に関する映画“*Matter of Level*”を撮影したのですが、その時測量省に協力して、それまで誰も目にするのできない場所にあったオランダの水準点をアムステルダムタウンホールに移して、一般の人々が自由に触れるようにしたのです。この水準点は、17世紀に設置されたヨーロッパ最初のもので、オランダ各都市の測量は全てこれに基づいています。そればかりでなく、その後ヨーロッパの全ての国々がこの水準点を基準とするようになり、現在はA. O. D.(Amsterdam Ordnance Datum)として国際的に知られています。この水準点にはじめて触れたある人は、ああ、自分は今、正真正銘の標高0mに手を置いているのだ、と感激したものです。

この時撮影した映画はソニーの賞をいただき、日本でも上映の機会を得ました。その際に、建設省(当時)の方の案内で永田町にある日本最初の水準点(Tokyo Peil, TP)を見せてもらったのですが、それが我がオランダの技術者、ドールンとリンドウの仕事であることを知って、本当に驚きました。オランダ人は誰一人として、この事実を知らないと思います。それからほどなく私は、明治初期に御雇い外国人として日本で働いた11人のオランダ人技師の名前を知ったのです。これが、彼らのドキュメンタリー映画“*In Japanese Rapids*”製作のスタートでした。

—“*In Japanese Rapids*”には、日本でも親しみの深いデレーケやドールンのほか、多くのオランダ技術者が登場します。あなたが特に共感を覚える人物は誰なのでしょう？

やはりリンドウです。彼は日本最初の水準点を設置し、川を科学的に扱うための基礎を築いたのです。彼は母国に多くの手紙を送っていますが、その優れた観察眼と、人間味溢れる筆致には、心を打たれます。家族によって全て大事に保管されていたことは、非常に幸運でした。私たちは、来年の3月に、これらの手紙を編集して出版する予定です。

—一方、日本の近代技術者でああなたの興味を惹く人物は誰かいますか？

私は田邊朔郎の琵琶湖疏水の仕事に大きな感銘を受けています。素晴らしい仕事です。全ての日本の技術者と京都市民、そして琵琶湖疎水の管理に携わる方々に私はお願いした

東京大学大学院助手 中井 祐

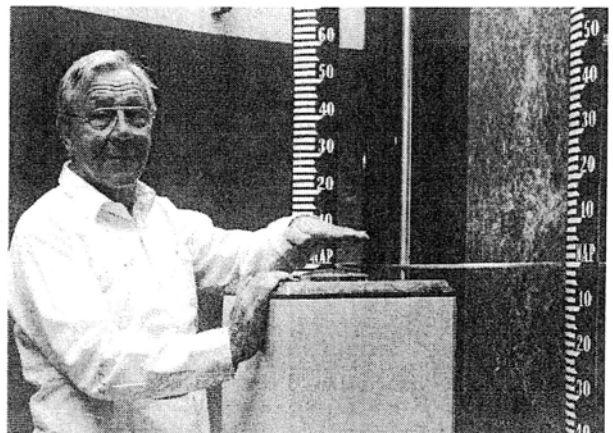
と思います。この優れた近代技術の記念碑を可能な限り復元し、運河に船を行き来させてほしい。そうすれば単なる観光名所以上のものを手に入れることが出来るはずですが、琵琶湖疏水はあなた方の明治の技術史そのものなものですから。—現在オランダ技師が仕事を残した全国各都市で映画“*In Japanese Rapids*”を上映する企画を進めていらっしゃいますが、その活動の目的を教えてください。

私はこのメッセージが、特にオランダ技師が足跡を残した土地の方々に届くことを大変光栄に思います。オランダ人技師たちは異国の地で大変な苦勞をし、妻や子供を亡くすなどの悲劇にも見舞われましたが、今や世紀をまたいで日本の方々に尊敬され、感謝されています。この映画は、異なる言語、異なる文化を有する人間が、誤解に基づく困難に直面しながらも互いに尊敬しあい、協力しあうことの重要性を訴えているのです。特に、現在の世界的な水利問題の解決には、多様な立場の人間の協働が絶対に必要なだと私は思います。それを、オランダ技師が仕事を残した地の方々とともに、発信していきたいと思うのです。映画は、まずは来年の3月に京都で開催される「世界水フォーラム」で上映する予定ですので、是非ご覧になっていただければと思います。

—最後に日本の技術者や研究者にメッセージをお願いします。

欧米や日本のように進んだ近代社会は、百年以上に及ぶ科学者と技術者の努力によってもたらされたものです。しかし一方で我々は、常にお互いを尊重しあうこと、そしてshizen(「自然」というのは、素晴らしい言葉です)に対する敬意の念を、大事にしていかなければならないと思います。

ルイ・ファン・ガステレン(Lous van Gasteren) : 1922年アムステルダム(オランダ)生まれ。映画の音響技術者としての経験を経て映画作家となる。現在オランダで最も著名なドキュメンタリー作家。2000年には、オランダ文化の紹介に寄与した人物に王室から送られる“*Silver Carnation*”(オランダで最も栄誉のある文化勲章)を授与されている。日蘭修好400年の実現にも尽力。



ガステレン氏

## 「第23回土木史研究発表会」の開催と講演用論文及び討議欄の募集

土木史研究委員会（委員長：中村 良夫・東京工業大学名誉教授）では、来年度の第23回土木史研究発表会の開催にあたり、下記要領にて講演用論文を募集いたしますので、奮ってご投稿下さい。土木学会のホームページ（http://www.jsce.or.jp/committee/hsce）でお知らせしたように、今回から論文審査の方法が全面変更となり、従来のように「審査付き論文」「自由投稿論文」とあらかじめ2つの区分に分けて投稿する方式から、まず「講演用論文」として第23回土木史研究発表会でご発表いただき、後から「審査付き論文」の形にまとめていただくことになりました。「審査付き論文」を最初から出すことはできなくなりましたので、くれぐれもご注意ください。

なお、土木史を専門に研究されておられない方、特に、構造、水理、土質、材料、施工などの技術史に関心をお持ちの方や、計画、景観に携わっておられる方の積極的な参加を希望します。最後に、過去の「土木史研究」に掲載された論文についての討議欄も従来通り設置していますので、下記の要領で投稿を受け付けております。

1. 主 催：土木学会（担当：土木史研究委員会）

2. 期 日：2003年6月18日（水）～19日（木）

3. 会 場：兵庫県民会館（神戸市中央区）

4. 募集内容：

- (1) 論文テーマ：自由（時代、対象、範囲等、すべて自由）。
- (2) 論文頁数\*：1～2頁以内（1頁2550字、9ポイント・25字×51行×2段組）。

\* 研究発表会の「講演用論文」に引き続いて「審査付き論文」の投稿を予定されておられる方は、「講演用論文」を2～4頁の「論文概要」の形で用意されてもかまいません。

(3) 使用言語：日本語もしくは英語。

5. 応募方法：

- (1) 講演申込方法：A 4判用紙に「第23回土木史研究発表会講演申込」と明記し、①題目（副題も可）、②発表者名・連名者名・所属、③会員種別、④連絡先・電話番号、⑤和文要旨（200字程度）、⑥過去の発表経緯、⑦セッション分類（別記参照）を記述して、FAXまたは郵送にて申込み下さい。講演申込受付後、執筆要項等を送ります。
- (2) 講演申込締切期日：2003年1月31日（金）必着
- (3) 論文\*\*原稿締切期日：2003年3月28日（金）消印有効  
\*\* 論文は『土木史研究（講演集）』（2003年6月刊）に掲載されます。
- (4) 論文掲載料：論文原稿提出時にお支払い下さい。「審査付き論文」に先行する「論文概要」の場合、2頁まで：5,000円、4頁まで：10,000円とします（単価を下げています）。それ以外は6頁まで：21,000円、8頁まで：28,000円、10頁まで40,000円、12頁まで54,000円（頁増により累進）。なお、著者負担でカラー印刷も受け付けます（1頁あたり5万円程度で実費清算）。
- (5) セッション分類：プログラム編成上のセッション分類

のため、下記に示す講演希望セッションを2段階分類で記入して下さい。なお、該当する分類がない場合は、キーワードを適宜ご記入下さい。

I 分野：人物史、技術史、社会・経済史（制度史を含む）、土木史一般（考古、研究方法論等を含む）、事例報告、その他。

II 分野：教育、測量、施工法、地域・都市、景観、交通（道路、鉄道等）、河川、海岸・港湾、衛生・上下水道、構造物（橋梁、トンネル、ダム等）、防災、エネルギー、農業（灌漑等）、保存工学・保存技術、修復・復元、その他

(6) 審査付き論文：第23回土木史研究発表会で講演用論文（もしくは、論文概要）を発表された方は、発表会における議論を踏まえた上で「審査付き論文」として投稿することができます（締切り：2003年9月26日（金））。詳細は別途公表致しますが、部門制の導入、12頁制限の撤廃など大幅な変更を予定しています。なお、採択された論文は『土木史研究（論文集）』（2004年6月刊）に掲載されます。

6. 討議欄の募集要項：

- (1) 討議欄の対象論文：既に『土木史研究』で発表された論文のうち、特定する論文1編。なお、討議欄は1回につき1人1編とします。
- (2) 討議欄の種別：討議の対象となる論文によって、種別を以下のように設けます。

A：自己の過去の研究に関する新たな知見や訂正を述べるもの

B：他者の論文に関する質問、意見を述べるもの

- (3) 討議頁数：1/2～2頁以内
- (4) 討議書式：書式（行数、字数など）は論文書式に準ずるが、以下の点を留意してください。
  - ① 英文題名、英文著者名、論文要旨は不要（本文は約6～9行目から始める）
  - ② 討議の対象論文と、討議を行う理由を本文冒頭にて簡単に記すこと
  - ③ 討議欄Bについては討議対象論文の著者（被質問者）の連絡先を合わせて提出すること
- (5) 掲載の採否：土木史研究編集小委員会で採否を決定いたします。
- (6) 討議欄での意見回答と発表：討議欄Aについては希望により研究発表会での発表を認めます。討議欄Bについては被質問者に連絡をした上その返答結果をあわせて掲載します。また討議欄Bの発表会での発表は認めません。
- (7) 討議欄の掲載料：1/2頁あたり1,500円
- (8) 原稿提出締切期日：2003年1月31日（金）必着

7. 送付先および問合せ先：

土木学会土木史研究編集小委員会（担当職員：丸畑明子）

〒160-0004 東京都新宿区四谷一丁目無番地

Tel. 03-3355-3559 / FAX. 03-5379-0125

E-Mail：maruhata@jsce.or.jp



## 土木学会平成14年度全国大会報告

本年度の土木学会全国大会は2002年9月25～27日、北海道大学を会場に開催された。ここでは、研究討論会及び学術講演会について報告する。

本年度の研究討論会は、「土木資料の保存を考える～古くて新しい土木の情報インフラ整備～」をテーマに、藤田龍之氏（日本大学）を座長として開催された。4名の話者提供からは、以下の内容が紹介された。1) 科研費共同研究の成果を基にした「有形・無形土木史料の保存・活用の考え方」（為国孝敏氏・足利工大）、2) 「土木史研究でのオーラルヒストリー事例」（藤井三樹夫氏・水環境研究所）、3) 「土木学会での土木技術者資料アーカイブ化の紹介」（原口征人氏・北大）、4) 「産業技術資料の評価・保存・公開と欧米のアーカイブ紹介」（高安礼士氏・千葉県）。土木史研究においては、史実を正確に把握し客観的な評価を行うために、また土木遺産を多面的に評価するためには、資料の存在は欠かせない。また将来のためにも「記録」は大変重要なことである。今回の討論会では、今までその扱いが明確ではなかった土木資料の記録・保存・活用について、参加者を含めて積極的かつ具体的な意見が多く出され、大変有意義な結果となった。ただし、22件の研究討論会が同一時間帯に重なっていたこと、開催支

部企画のテーマが「近代土木遺産の保存・活用事例紹介」であったこと、等により参加者が20名弱であったことは、残念な結果であった。

一方、学術講演会では、第2日目と3日目に「土木史(1)」と「土木史(2)・景観評価」の2セッションが開催された。「土木史(1)」は知野泰明氏、「土木史(2)」は星野裕司氏を座長とし、合わせて15件の研究発表がなされ、両セッションとも約40名の参加者を数えた。「土木史(1)」では、史料の保全・活用や石垣構造等に関する論文発表がなされ、提案された史料の保全方策や歴史的構造物の調査結果の活用について議論が交わされた。座長を務めた知野泰明氏は、史料の保全・活用の具体化をセッションの特徴として総括された。「土木史(2)・景観評価」では、事業評価や景観の歴史的変遷等に関する論文発表がなされた。それに対し、評価の基とした史料や景観を構成していた主体の戦略に関する質問がなされた。なお、本年度は液晶プロジェクターを用いた発表が試行された。両セッションともおよそ半数の講演者が液晶プロジェクターによって発表を行っていた。

(足利工業大学 為国孝敏、北海道大学 日野 智)

## 行事案内

### デザインワークショップ2003

都市や地域の望ましいあり方を追求し、優れた土木施設や風景の実現を図っていくためには、優れた構想力・発想力や創造力が第一に求められることは言うまでもありません。しかし、時代の先端を拓いていく構想力や創造力は、一朝一夕に生まれるものでもありません。田辺朝郎や廣井勇ら一流のエンジニアたちは、歴史的な視野を携えつつ問題の解決を構想・発想することの重要性を理解していたに違いありません。今回のデザインワークショップは「歴史の創造性」と題して、特に橋のデザインと地域・都市戦略という二つの問題をとりあげ、歴史を見渡す視野が現代の問題に取り組む上でいかに有効であるかを考えます。

主催：土木学会景観・デザイン委員会＋土木史研究委員会

日時：2003年1月15日（水）13：00～17：10

会場：東京工業大学百年記念館フェライト記念会議室

定員：130名

参加費：2,000円（別途、昨年度報告書「機能空間のデザインーその思想と手法ー」を、当日1,000円にて販売致し

ます）

プログラム：総合司会：佐々木葉（日本福祉大学）

第一部「橋のデザインとオリジナリティ」小林一郎（熊本大学）、鈴木圭（鹿島）、中井祐（東京大学）

第二部「土木と地域・都市戦略」天野光一（日本大学）、為国孝敏（足利工業大学）、北河大次郎（文化庁）

講演「歴史の創造性」土木史研究委員会委員長／中村良夫（東京工業大学名誉教授）

17：30より懇親会を開催します。（別途、参加費4,000円程度を予定）

申し込み方法 学会誌綴込みの「本部行事参加申込書」に所定事項を明記の上、土木学会行事担当宛FAXにてお申し込み下さい（申込締切日 12月20日（金））。詳しくは学会誌をご覧ください。

問合先 土木学会研究事業課（事務局担当：工藤）

TEL 03-3355-3559/FAX 03-5379-0125/

E-mail kudo@jsce.or.jp

### 土木計画学ワンデイセミナー

近代以前の土木遺産およびその史料については技術的、歴史的評価がなされており、保存される例が増えつつあります。しかし、昭和30年以降の我が国の高度経済成長を支えてきた大規模社会基盤施設に関しては、建設からの時間が短いために歴史的な評価にはなじまなく、しかも土木計画学的な事後評価も本格的に行われてきませんでした。我が国が世界に誇る戦後の土木事業、土木技術、大規模社会基盤施設を将来にわたってその役割を伝えるためには、計

画史的観点から正当に評価する必要があります。このような問題意識を受けて土木計画学研究委員会「大規模社会基盤施設の計画史的評価に関する研究小委員会」では、下記の通りにワンデイセミナーを開催いたします。本小委員会がこれまで取り組んできた研究の成果を広く世間に公表し、参加者間の情報交換やフロアとの議論を通じて、大規模社会基盤施設の今後の評価のあり方を探ることを目的としています。

ふるってご参加ください。なお、詳しい内容、スケジュールにつきましては土木計画学研究会ホームページを通じてご案内する予定です。  
(<http://www.jsce.or.jp/committee/ip/>)

日 時：2002年3月13日(木) 10:00～17:10  
会 場：土木会館講堂  
参加費：3,000円を予定

## 第9回 土木の文化財を考える講演と討論の会

第9回土木の文化財を考える講演と討論の会が下記の要領で開催されます。ふるってご参加ください。

日時：平成14年12月21日 13:00～17:00  
場所：東京大学構内山上会館（東京都文京区本郷7-3-1）  
講演①：「日本の近代化遺産を歩く」  
講師：増田彰久（写真家、早稲田大学講師）

幕末から明治・大正・昭和・戦前期にかけて建設され日本の近代化に貢献してきた工場、トンネル、発電所、ダム、無線塔など。今、身近な文化財として脚光を浴びているこれらの「近代化遺産」を紹介します。

講演②「日本の近世の城と石垣」  
講師：新谷洋二（工学博士、東京大学名誉教授）

各地での修築・復元・発掘が進むにつれ新たな実態が分かかってきた城と石垣。その基礎知識とともに、江戸城・金沢城・仙台城などの石垣の実態と課題を主として写真を用いて紹介します。  
特別企画「安芸皎一博士生誕百年を記念して」高橋裕会長他

主催：土木の文化財を考える会  
申し込み・問合せ先：河野宏（住鉦コンサルタント内）  
110-0008 東京都台東区池之端2-9-7  
TEL/03-3827-6134 FAX/03-3827-6144  
URL/<http://www2.handy.n-fukushi.ac.jp/~sasaki/myweb/doboku/home.htm>

### 文化財ニュース

## 重要文化財・登録文化財となった土木構造物一覧

土木関連重要文化財（平成14年9月答申）

名称	所在地	建設年代	特徴等
三角旧港（三角西港）施設	熊本県三角町	明治20年	明治前期に建設された近代港湾の中で唯一ほぼ完存。西歐式的设计に基づき、熊本で伝統的に培われた高度な石造技術が遺憾なく発揮された大規模土木構造物。

土木関連登録文化財（平成14年9月答申）

石崎漁港トンネル	北海道ノ国町	昭和9年	漁港と外港の通航のために建設されたCブロック造隧道。中村廉次の計画と伝わる。
旧国鉄士幌線第六音更川橋梁	北海道上士幌町	昭和13年	7連アーチ式充腹コンクリート造橋梁で、大雪山国立公園の渓谷美との調和を計る。
旧国鉄士幌線音更トンネル		昭和12年	大雪山山麓の凍土に建設された、曲面平面を有す延長165mの隧道。
丹勢山砂防堰堤	栃木県日光市	昭和3年	小真名子山を水源とする大谷川左支荒沢に建設された谷積の練積堰堤。幅広の水通し部を曲線で形作るのが特徴的。
大久保砂防堰堤		昭和4年	
小米平砂防堰堤		昭和6年	内務省時代の稲荷川砂防工事による堰堤群中最上流に位置する重力式練積堰堤。
方等上流砂防堰堤		昭和27年	男体山を水源とする大谷川左支深澤筋に築かれ、精緻な石積の外観を呈する。
旧東京第二陸軍造兵廠深谷製造所給水塔	埼玉県深谷市	昭和19年頃	RCラーメン構造で内部を5層とした高さ18mの建造物。
天野川砂防堰堤	大阪府交野市	明治30年頃	淀川水系天野川に位置し、水通し部を緩勾配で築いた石造空積堰堤。
尺治川砂防堰堤		明治後期	天野川右支尺治川に位置し、特異な形態を有す石造空積堰堤。
尺治川床固工		明治後期	急傾斜地の谷筋に位置し、地形に合わせ縦・横断面それぞれを凹型曲線とする。
旧井口三番浜丸樋	愛媛県上浦町	江戸末期	芸予諸島大三島の東岸に位置する塩田施設の海岸線と塩田跡が接する堤防沿いに築かれた石積建造物。塩田の余水排出を主な目的とする。外側を半円状に張り出した石造壁が海水の排出を確保しつつ風浪による樋の損傷を防ぐ。
井口四番浜南丸樋		江戸末期	
井口四番浜北丸樋		江戸末期	

土木史関係図書

近代化遺産（建造物等）総合調査報告書（注）編集、発行所はすべて各県教育委員会。すべて非売品。

県名	発行日	県名	発行日	県名	発行日	県名	発行日
秋田県	92.3	富山県	96.3	山口県	98.3	京都府	00.3
群馬県	92.3	岐阜県	96.3	長崎県	98.3	山形県	01.3
福岡県	93.6	三重県	96.3	福井県	99.3	宮城県	02.3
新潟県	94.3	岩手県	97.3	熊本県	99.3	高知県	02.3
大分県	94.3	山梨県	97.3	青森県	00.3		
北海道	95.3	鳥取県	98.3	静岡県	00.3		
埼玉県	96.3	広島県	98.3	滋賀県	00.3		

市町村が作成した近代化遺産関連図書

書名	著者・編者	発行日	定価
横浜の土木遺産	横浜市・横浜市歴史的資産調査会	02.3改訂(88.10)	1200円
文化財基礎調査概報・近代化遺産	柏原市教育委員会	00.3	非売品
舞鶴市の近代化遺産	舞鶴市・舞鶴市教育委員会	01.3	非売品
産業都市のモニュメント 北九州の土木	北九州市・(財)北九州都市協会	96.3	1200円

文化財目録関連図書

書名	著者・編者	発行日	定価
国宝・重要文化財大全 1 1 建造物（上巻）	文化庁監修	98.12	35,000円
国宝・重要文化財大全 1 2 建造物（下巻）	文化庁監修	00.3	35,000円
国宝・重要文化財大全 別巻 所有者別総合目録・名称総索引・統計資料	文化庁監修	00.7	35,000円
登録有形文化財目録	文化庁建造物課	02.3	

その他

書名	著者・編者	発行日	定価
明治期灯台の保全	灯台施設調査委員会・灯台施設保全委員会	01.3	非売品

メール会員登録のお願い

先般の読者アンケートの結果からメール配信でよいとする方がかなりいらっしゃいましたので、発送の経費ならびに作業軽減の為、希望される方からメールによる配信に切り替えて行きたいと存じます。メール配信を希望される方は、メール会員として登録しますので、登録希望のアドレスを担当の日野智委員（Email / pno@eng.hokudai.ac.jp）までご連絡ください。

土木史フォーラム小委員長 昌子 住江

編集後記：次号からメールによる配信が開始され、これによりより多くの方に読んでいただくことも可能となります。そのためにもより一層内容の充実に向けて参りますので、ご協力をお願いします。また、前号において土木史ニュース執筆者名を田辺純正氏としましたが、正しくは田部純正氏です。慎んで田部氏ならびに読者の皆様にお詫び申し上げます。

土木学会土木史研究委員会監修  
土木史フォーラム No. 22  
発行者 土木史フォーラム小委員会  
代表者 昌子 住江  
事務局 関東学院大学工学部 鈴木 伸治  
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1  
TEL/FAX 045-786-7751  
Email: nsuzuki@kanto-gakuin.ac.jp  
URL: http://home.kanto-gakuin.ac.jp/~nsuzuki/forum/index.htm

CONTENTS

- NEWS  
Admiration of civil engineering heritage by JSCE
- FORUM  
Traditional Technique in River Engineering KOURURA Kenyuu
- LOCAL NEWS  
Horikawa Canal and Townscape of Aburatsu OKAMOTO Takenori  
Former Utsuno Power Plant and its Water System MIYAMOTO Hiroshi
- OVERSEAS NEWS  
Lous van Gasteren's "In Japanese Rapids" -Footprints of Dutch Engineers in Japan- NAKAI Yu
- REPORT FROM CHSCE (Committee on Historical Studies in Civil Engineering)  
Call for Papers of 23rd Annual Meeting of CHSCE  
Report on annual meeting of JSCE TAMEKUNI Takatoshi
- WHAT'S On  
Design Workshop 2003, etc. HINO Satoru
- Civil Engineering Works on Latest Heritage Registration List
- BOOK GUIDE KITAGAWA Daijirou